

下関短期大学保育学科音楽ゼミナール活動報告

——オペレッタの表現の可能性をめぐる——

木戸純子・大下紋加¹⁾・安達真理子²⁾・田中順子³⁾

Music Seminar Activity Report of the Department
of Early Childhood Education

—Centered on Presentation of Operettas—

by

Junko Kido, Ayaka Oshita, Mariko Adachi and Junko Tanaka

要旨

下関短期大学保育学科 音楽ゼミナール（略称「木戸ゼミ」）は、2008年に保育学科の授業（現「児童文化」、「保育実践演習」）の一環として活動を開始して以来、オペレッタを中心とした作品の制作・発表を行ってきた。その研究目標は、総合芸術としてのオペレッタの表現の可能性を求めながら、子どもと大人という異年齢の聴衆が同時に楽しみ、その価値を共有できる作品を上演することであり、「バランス良く歌い、踊り、演奏し、演じる」というスローガンのもと活動を行ってきた。こうした一貫した目標のもと7年目を迎えた本ゼミナールには、楽器演奏の技術が卓越した者、舞踏を得意とする者、歌唱を愛する者、表舞台には出ないが大道具・小道具制作に専心する者、台本制作・記録により活動を支える者、あるいは演出等指導力がある者、などそれぞれに得意分野の異なる数多くの学生が在籍し表現活動を行ってきた。本稿はその研究の歩みを概観し、上演作品を中心として報告するものである。

キーワード：オペレッタ、総合芸術、中・四国保育学生研究大会、
保育学科創作発表会

1)下関市立吉見保育園保育士

2)下関短期大学保育学科2年

3)下関短期大学保育学科2年

1. はじめに — オペレッタと音楽ゼミナールの研究目標について —

オペレッタとは、文字通り「小さなオペラ」の意で、ロマン派時代の19世紀半ばにフランスで誕生し、ドイツで流行した。日本の運動会のBGMでもおなじみのオッフェンバック(J. Offenbach 1819年ケルン生～1880年パリで没)による「天国と地獄」がその起源であると言われる。このジャンルは、台詞や歌、ダンスを織り交ぜた音楽小喜劇であり、風刺とウィットに富んだ愉快的な内容になっている。激しいダンスを重視し、厳密にはブロードウェイ上演の作品を指すミュージカルとは異なる。小規模な構成の軽い作品であるため、近年、日本でも幼児向けのオペレッタが制作され、発表会の舞台上で好んで演じられている。

下関短期大学保育学科音楽ゼミナール(略称「木戸ゼミ」「音楽ゼミ」)は、2008年に保育学科の授業(現「児童文化」「保育実践演習」)の一環として活動を開始して以来、オペレッタを中心とした作品の制作・発表を行ってきた。その研究目標は、総合芸術としてのオペレッタの表現の可能性を求めながら、子どもと大人という異年齢の聴衆が同時に楽しみ、その価値を共有できる作品を上演することである。「バランス良く歌い、踊り、演奏し、演じる」というスローガンのもと活動を展開し、本ゼミナールは7年目を迎えた。次章では、2008年度から2014年度の発表作品に関する活動報告を行う(2009年度は略記した)。

2. 発表作品と活動

2・1 2008(平成20)年度発表作品：ゴスペル劇「サンタが街にやってきた」

2008年度に発表したゴスペル劇の上演日・催事名・会場と所属学生は次の通りである。

1) 上演日等

- ・2008年12月6日(第49回中・四国保育学生研究大会)於:高松大学・高松短期大学
- ・2008年12月13日(下関短期大学保育学科創作発表会)於:下関シーモールホール

2) メンバー

(2年生) 山田紗弓、佐藤文香、中野沙央理、江島智佳子、坂田菜穂子、吉野ひとみ

(1年生) 伊澤楓、石迫沙希、板垣舞央、岩崎優美、浦柝のぞみ、尾辻直子、片岡志帆、
近藤元美、鍋島輝美、藤原十奈美、美馬陽子 以上17名

2・1・1 制作の経緯

音楽ゼミ第1期生ともいえる2008年度生には、ミュージカルや吹奏楽経験者が多かったため、初めてのオペレッタの試みに果敢に挑戦した。題材は、第2次ゴスペルブームの波に乗り

ゴスペルとしたが、独特のシャウト唱法を身につけることが第一の課題であった。従って、楽器演奏や舞台美術制作に費やす時間を省略し、演題も完全な「オペレッタ」と名付けることは控え、ピアノ伴奏のみによる小規模な「ゴスペル劇」と命名した。

まずは、正統的な唱法修得のために、ゴスペル歌手・佐藤美紀子氏（ゴスペルクワイヤ“Angelic Shout!!”代表、北九州市在住）の指導を受けることからスタートした。腹筋を鍛えながらも全身を柔らかく緩め、激しいリズム感で魂の叫びを歌にする、といった初めての経験に、学生たちは戸惑いながらも喜び震え、練習に集中した。

この題材の設定に不安がなかったわけではない。アフリカの民族音楽とアメリカのキリスト教音楽等の融合体である特殊なゴスペルに、子どもたちは共感を覚えるだろうか、という問題があった。しかしながら、佐藤氏から多くのクワイヤ演奏会での子どもたちの反応を伺うと同時に、筆者（指導教員）自身も演奏会に足を運び、直接子どもたちのリズム感の良さに触れることで、その不安は払しょくできた。近年の子どもたちが、クレヨンハウスの歌等のポップ、ロック、ジャズの要素を含んだ歌に慣れているからであろう。

2・1・2 台本とコンセプト

台本は、学生と筆者が共に一から作成したオリジナルである。物語は、昼間は敬虔なシスターたちが（写真1）、実は夜になるとサンタクロースに変貌する（写真2）という内容であり、子どもたちが好む「変身」のストーリーである。「変身」前後の男女の性が一致していないのではないか、との指摘も受けたが、そこは寓意ということで理解していただいた。



写真1 ゴスペル劇「サンタが街にやってきた」



写真2 ゴスペル劇「サンタが街にやってきた」

2・1・3 音楽とダンス

ゴスペルソングについては映画「天使にラブソングを」（1992年、アメリカ、原題“Sister Act”）の挿入曲「Hail Holy Queen」「I Will Follow Him “Chariot”」の2曲、およびクリスマスソング「サンタが街にやってきた」の計3曲を楽譜通りの編曲で合唱した。伴奏はピ

アノにより、学生が担当した。

ダンスはソウル系・ゴスペル系のものを創作したが、最初は動きに硬さが見られた学生たちも、佐藤氏にチェックをしていただき、徐々に祈りのダンスに集中するようになった。

2・1・4 結果と課題

音楽ゼミナールとして初めての中・四国保育学生研究大会での発表であったが、舞台転換の手際や暗転回数の多さに課題を残した。翌週の下関短期大学保育学科創作発表会ではスタッフも増えてこの問題は解消できた。

2回の上演を経て、周囲の方々から「最初は、英語の歌を子どもたちが理解できるのか疑問であったが、作品からほとぼしる生命力、魂の叫びは、年齢を問わず人々の心を動かすであろう。」というお言葉をいただいた。音楽ゼミの活動目標に少しでも近づけたと確信し、次回は是非、本格的なオペレッタを行いたいと考えた。

2・2 2009（平成21）年度活動について

2009年度は、本学が「第50回 中・四国保育学生研究大会」（期日：12月5日、会場：海峡メッセ下関）の当番校であった。従って、音楽ゼミの学生も当番校として受付・案内等を行いながら各校の研究発表を見学し、今後の舞台発表の参考とした。また、2009年度の創作発表会（期日：12月18日、会場：下関シーモールホール）では、オペレッタ「アニマル・パーティー」を発表した。

2・3 2010（平成22）年度発表作品：オペレッタ・子どもゴスペル・フラダンス

2010年度、音楽ゼミは、オペレッタ・子どもゴスペル・フラダンス発表に取り組んだ。上演日・催事名・会場と所属学生は以下の通りである。

1) 上演作品名・上演日（催事名）・会場

①オペレッタ「南の島のゆかいな仲間たち」

上演日 2010年12月11日（下関短期大学保育学科創作発表会）於：下関シーモールホール

②子どもゴスペル 「お花がわらった～手のひらを太陽に」

上演日 2011年3月20日（下関市フォーキッズフォーラム）於：下関シーモールホール

③フラダンス「南の島のハメハメハ大王」

上演日 2011年3月20日（小倉チャチャタウンフラダンスショー）於：チャチャタウン

2) メンバー

（2年生） 西中幸、石井萌美、磯部一矢、上島さつき、岡本直樹、小原真広、秀島成美、古川明日香、村上絵梨

(1年生) 山口慧、飯島亜希子、小柳絢、徳原洋子、濱本遙加、松本和恵、美原美美、
山本一繁 以上17名

2・3・1 オペレッタ「南の島のゆかいな仲間たち」

Web上では非公開ですので、
冊子をご覧ください

写真3 園児と一緒に踊りも
「山口新聞」2010年12月13日

1) 制作の経緯・発表

2010年度は、保育学科2年生の男子学生3名と、ミュージカル経験のある女子学生1名が増えて、より多彩な表現が可能となった。

映画「フラガール」(2006年、日本)に着想を得て、夏の保育園実習でよく歌う「南の島のハメハメハ大王」とフラダンスを結びつけた題材を考案した。下関短期大学保育学科創作発表会における舞台発表では、子どものためのオペレッタであるため実際に子どもたちにも出演してもらった。下関短期大学附属第一幼稚園の園児10名、本学社会人学生の長男1名、計11名がハメハメハ大王の子ども役として出演、フラダンスを披露し、拍手喝采を受けた(写真3)。

2) 台本とコンセプト

台本は学生と筆者で共に作成した。あらすじは以下の通り。3部構成で、第1部はクリスマスイブ。仕事を終えたサンタクロースのもとへ聖母マリアが現れ、ご褒美に南の島への旅をプレゼントする。第2部はハワイ、村人と共に踊るサンタのもとへ、ハメハメハ大王夫妻と官房長官が登場し、ハワイのテノール歌手まで現れ、皆で歌い踊る(写真4)。一転して第3部では一年後のクリスマスイブ。仕事に戻ったサンタクロースは、会場の聴衆と共にリトミックを行う。このように、欧米風竜宮城のおとぎ話で、夜と昼、寒と暖、闇と光の対比を強調した。

3) 音楽とダンス

フラダンスの振り付けと指導は、本学非常勤講師の名越幸子氏にお願いし、衣装も同氏主催の教室のものをお借りするという幸運を得た。主要楽曲は、以下のとおりである。



写真4 「南の島のゆかいな仲間たち」

- ・ベツレヘム教会の鐘の音（オープニング）
- ・讚美歌「Amazing Grace」（天使による独唱）
- ・クリスマスソング「Jingle Bells」（トーンチャイム合奏）
- ・エルガー「威風堂々」（ハメハメハ大王夫妻入場の際のライトモチーフ、CD）
- ・伊藤アキラ、森田公一「南の島のハメハメハ大王」（CD「ロコモコ子どもジャズ」）
- ・ヴェルディ「誰も寝てはならぬ」～オペラ「トゥーランドット」より

4) 結果と課題

音楽ゼミ3年目で、ある程度オペレッタの形が整った。音楽、ダンス、演技のバランスは良く、音源はCDを使用したのが、学生は、踊りながらしっかりと発声で歌うことができた。舞台背景は、ステージの都合上、白い幕の上にプロジェクターで映像を映し出した。選択楽曲も子どもの歌のみならず、クラシックや教会音楽、オペラのアリア、と種々のジャンルを並べた。次回は多くの楽器を使い、総合芸術としての完成度を高めたいと思った。

2・3・2 子どもゴスペル「お花がわらった～手のひらを太陽に」

下関市主催の「下関市フォーキッズフォーラム」は、市内の保育所・幼稚園・大学による子育て支援行事である。

本ゼミは、1年生が「子どもでも歌えるゴスペルを」という目的のもと、「お花がわらった（保富康午、湯山昭）と「手のひらを太陽に」（やなせたかし、いずみたく）の2曲を創作ダンスと共に歌った。伴奏は電子ピアノを持ち込んだ。前者については、筆者が2部合唱に編曲、ボーカリーズの前奏・後奏をつけた。後者は、亀淵友香編の「Let's Sing Gospel」（カワイ出版）掲載の曲を使用した。アフタービートの乗りも良く、手作りのポンポンの揺れも効果的で、生命力を感じさせるステージとなった（写真5）。



写真5 子どもゴスペル「お花がわらった～手のひらを太陽に」

2・3・3 フラダンス「南の島のハメハメハ大王」

本ゼミの1年生が、オペレッタ「南の島のゆかいな仲間たち」のフラダンスの部分を抜粋して、名越幸子フラダンス教室の皆さんと「小倉チャチャタウンフラダンスショー」に出演した(写真6)。穏やかに見えるフラの動きが、実は強固な腰の軸に支えられていることを身をもって体験し、ダンスの基礎の幅が広がった。



写真6 フラダンス「南の島のハメハメハ大王」

2・4 2011(平成23)年度発表作品：オペレッタ「ドコノキノのこ～おねえさんといっしょ～」

2011年度に発表したオペレッタの上演日・催事名・会場と所属学生は次の通りである。

1) 上演日(催事名)・会場

2011年12月3日(第52回中・四国保育学生研究大会)於:松山東雲女子大学

2011年12月17日(下関短期大学保育学科創作発表会)於:下関シーモールホール

2) メンバー

(2年生) 山口 慧、井元弥生、飯島亜紀子、徳原洋子、松本和恵、山本一繁

(1年生) 森川亜弥香、岩坂晃輝、打田稚怜、北川裕子、木村朱里、坂野和美、田畑智子、橋本佳奈、藤井賀子、山本恵理花、吉坂菜摘、米田未希 以上18名

2・4・1 制作の経緯

2011年度は、ジャズダンス、ピアノ、ギター、種々の管楽器等を得意とする学生が揃い、小オーケストラの導入とダンスの強化がテーマとなった。

題材は、NHKテレビ「おかあさんといっしょ」の中から5曲を選び、中でも「ドコノキノココ」をテーマ曲に決め、早くから編曲と楽器演奏に取りかかった。

前年度に続き、今年度も本学付属第一幼稚園の園児4名に賛助出演をしていただいた。

2・4・2 台本とコンセプト

性質の全く異なる5曲「ドコノキノココ」「ちょんまげマーチ」「クシカツはいっぼん」「ばわわぶたいそう」「みんなみんなみんな」を使って一つの物語にすることは、大変な想像力と創意が必要であったが、経験豊富な2年生が知恵を出し合って台本を作成した。

コンセプトは、「歌って! 踊って! 奏でよう～お姉さんといっしょ」であった。第52回中・

四国保育学生研究大会での発表の際は、これを演題とした。

2・4・3 音楽とダンス

オペレッタで上演した音楽とダンスは以下の通りである。

・「ちょんまげマーチ」

中・四国保育学生研究大会では、時間の制約上割愛した。時は江戸時代。あんみつ姫と陽気な殿、そして侍の3名が歌い踊る。

・「ドコノコノキノコ」

殿の頭についていたキノコが時空を超えて現代へ飛び、次々に増殖し、赤いマントと傘で装った9人のキノコ隊が歌い踊る（写真7）。合奏隊はステージ下で演奏した。楽器編成は次の通り：エレキギター、マリimba2、ビブラホン2、ピアノ、鍵盤ハーモニカ2、木魚、ウッドブロック。



写真7 「ドコノコノキノコ」



写真8 「クシカツはいっぼん」

・「クシカツはいっぼん」

場所はパリ。2人のバンドネオン奏者がシャンソンを奏でる。そこへ、恋人1組と子ブタ、タマネギの4人が登場し、フレンチカンカン風の「クシカツはいっぼん」を歌い踊る。大阪のクシカツとパリの風景のミスマッチや、「肉だけではなく野菜も食べよう」という食育も織り交ぜたこの演目は、本作品の中で最も人気のあるシーンの一つである（写真8）。

・「ばわわふたいそう」・「みんなみんなみんな」

場面変わってキノコ畑。出演者全員と本学付属第一幼稚園園児がキノコに扮して歌い踊る。なお、キノコは木材で等身大のキャラクターを作り、5曲のすべてのシーンに登場させ、ライトモチーフとした。

2・4・4 結果と課題

中・四国保育学生大会では、聴衆の反応が非常に良く、講評では「今すぐにでも子どもの発

表会に使える表現力豊かなステージで、特に“クシカツはいっぼん”の4人が魅力的であった」というお言葉をいただいた。問題点としては、松山市まで楽器を解体して運んだため、荷解きや慣れないステージ設定が大変であったことである。しかし、2年がかりの夢であった同大会での発表を終えて、学生たちは自信を得たようだ。

続いて2週間後の保育学科創作発表会では、反省点を生かし、短大職員の皆さんや他ゼミの学生のサポートもあり、より良い舞台ができた。あんみつ姫の着付けについては、河野光子教授がモダンな和装姿にしてくださった。

「バランス良く歌い、踊り、演奏し、演じる」という音楽ゼミの目標への達成感を得ることができた。

2・5 2012（平成24）年度発表作品：オペレッタ「ピクニック」

2012年度に発表したオペレッタの上演日・催事名・会場と所属学生は以下の通りである。

1) 上演日（催事名）・会場

2012年12月15日（下関短期大学保育学科創作発表会）於：下関シーモールホール

2) メンバー

（2年生） 山本恵理花、打田稚怜、岩坂晃暉、木村朱里、久原春香、坂野和美、田畑智子、橋本佳奈、藤井賀子、吉坂菜摘、米田未希

（1年生） 岩本真子、飯田友恵、井上裕美、上田恵梨子、遠藤春香、大下紋加、岡本妃菜実、木村理果、斉藤紫帆、高橋沙也加、中嶋悠里、永山果歩、平井和美、宮田希柚

以上25名

2・5・1 制作の経緯

年度を追う毎に所属学生の人数が増え、作品も大規模になった本ゼミは、2012年度はダンス班と楽器班に分かれて練習を開始した。選んだ題材は「ピクニック」で、前作品から一転し、子どものささやかな日常を描くシンプルなオペレッタとした。楽曲は、NHK教育テレビの「おかあさんといっしょ」から6曲を選んだ。

また、小オーケストラにはバイオリンとチェロが加わり、表現の幅が増すことになった。

2・5・2 台本とコンセプト

台本は学生が作成した。物語は、子どもたちが晴天の日に公園にピクニックに行き、5匹の子ぶたと出会って歌い踊り、雨上がりの虹に希望を見て家路につく、という内容である。台詞は最小限に抑え、創作ダンスと合奏・歌唱のトレーニングに励んだ。

2・5・3 音楽とダンス

オペレッタで上演した音楽とダンスは以下の通りである。

- ・「ピクニックマーチ」

子どもたちの登場を知らせるオープニングダンスで、振り付けは番組のオリジナルを基に、学生が多少アレンジを加えた。

- ・「公園に行きましょう」

公園にピクニックに出かけるシーンのダンスで、ボディーパーカッションを加えた。

- ・「あ・い・う・え・おにぎり」

子どもたちがお弁当を見せ合うシーンのダンスで、おかか（鰹節）、鮭などおにぎりの具材をデフォルメして描いた頭飾りをつけて臨んだ。



写真9 「5匹の子ぶたとチャールストン」



写真10 「5匹の子ぶたとチャールストン」
オーケストラ

- ・「5匹の子ぶたとチャールストン」

子どもたちが5匹の子豚と出会い、ともにチャールストンを踊るメインステージである（写真9）。アレンジは、学生と筆者がブルーノートを駆使して行った。小オーケストラ（ジャズスタイルコンボバンド）を編成して演奏した（写真10）。楽器編成は以下の通り：バイオリン、ピアノ2、マリンバ、コントラバス、ドラム、マラカス、タンバリン、レインスティック。

- ・「ぼよん行進曲」・「虹のむこうに」

音源をCDに、出演者全員が舞台上と下で踊った。ラストでは、舞台背景に学生が苦心して作った虹の仕掛けがライトアップされ、幕が下りる。

2・5・4 結果と課題

初めて純粋な子ども向けオペレッタを作成した経験は、新鮮であった。ダンス・舞台装置作成・楽器演奏の3点がポイントとなった。課題としては、大人数で行う場合、お互いの意思疎通にもっと工夫が必要ではなかったか、ということであった。

2・6 2013（平成25）年度発表作品：音楽絵本・オペレッタ

2013年度に発表した音楽絵本・オペレッタの題名・上演日・催事名・会場と所属学生は次の通りである。

1) 音楽絵本 「おばけパーティー」

- ・2013年7月20日（下関短期大学保育学科オープンキャンパス）於：下関短期大学
- ・2013年10月26日（下関市フォーキッズフォーラム）於：下関シーモールホール

2) オペレッタ 「クリスマスファンタジー」

- ・2013年11月30日（第53回中・四国保育学生研究発表会）於：くらしき作陽大学
- ・2013年12月14日（下関短期大学保育学科創作発表会）於：下関シーモールホール

3) メンバー

- （2年生） 大下紋加、岩本真子、飯田友恵、上田恵梨子、斉藤紫帆、高橋沙也加、中嶋悠里、永山果歩、平井和美、宮田希柚、山中香織
- （1年生） 田中順子、宮川柚香、安達真理子、岩崎千里、大田彩加、木下智恵、坂村沙都紀、水津隆光、手嶋美奈子、山本朱香 以上21名

2・6・1 音楽絵本 「おばけパーティー」

2013年度は、音楽が得意な学生のみならず、演劇経験者や絵本研究を行う学生も加わり、オペレッタ制作の前に「音楽絵本」という初めての表現を試みた。全体的に「動」の部分の多いオープンキャンパスのプロラムであるが、中でもこの音楽絵本は「静」の部分にあたる。絵本に音楽表現を加えることで、観客を絵本の世界へより深く吸い込もうというねらいを持つ。

1) 絵本選択

絵本選択については、3つの観点に絞った。第一に、20名弱の高校生の前で演奏するにあたり皆が見やすい大型絵本とすること、第二に作り手（演奏者側）が音をイメージしやすいもの、第三に読み聞かせ部分と楽器紹介を合わせて10分以内に終わるものを探した。以上の3点を満たすものがジャック・デュケノワ著「おばけパーティー」であった。

2) 台本作成・楽器選定・声の効用

台本作成は絵を写し取る作業から始まった。台本に台詞を書きながら、どのシーンに音楽を組み込むか、イメージを膨らませながら下書きをした（図1）。

次に楽器選定に臨んだが、選定作業は大変苦労した。子どもが対象となるものを“演奏”で表現したかったため、映画の効果音ほどリアルではなく、万人がイメージしやすい音を求めた。例えばカクテルを注ぐシーンなど、どのように表現すべきか迷う音が多くあった。そこで楽器の概念を広げ、“もの”も楽器として扱うことにした。カクテルのシーンでは観客の目の前で水をコップからコップに注いだ。音へのイメージが学生により違うことは、楽器選定で多くの

2013年7月オープンイベント 音楽部(事務班)
音楽劇本「おばけパーティー」 <10分>






 <p>♪♪♪♪ ♪♪♪♪ ♪♪♪♪ ♪♪♪♪ ♪♪♪♪ ♪♪♪♪ ♪♪♪♪ ♪♪♪♪</p> <p>1</p>	<p>「今日は音楽絵本を演劇いたします。 絵本の中から、色々な音が耳元まで聴こえてきますよ! それでは、(はじり)、(はじり)…」 一人ずつ持ち場にづく。 田中「おばけパーティー」 X716 (紙筒)</p>
 <p>ふん ふん ふん</p> <p>2</p>	<p>大田: CDを流す (カリン)</p> <p>↓ X19 魔法し続ける (リセット班)</p> <p>手島: カバサを鳴らす (カバサ班…)</p>
 <p>ふん ふん ふん</p> <p>3</p>	<p>X716</p> <p>じ: 「アツはまたキッチンで 大いそがし」</p> <p>↓ カバサやる</p>
 <p>「そぞろのみのをばこぶろ いいーい」</p> <p>4</p>	<p>X716</p> <p>安達: テンホイスル (ピョッ)</p> <p>じ: 「そぞろのみのをばこぶろ いいーい?」 安達: 「はーい!」</p>
 <p>「あれ? おばけがとあらない」</p> <p>5</p>	<p>X716</p> <p>安達: テンホイスル (ピョー)</p> <p>+ 本津: ビラララカッ! にびる (カッ)</p> <p>じ: 「あれ? おばけがとあらないぞ」</p>

図1 田中順子作「おばけパーティー」台本

アイデアが湧くということであり、困難な音選びにより、音楽表現の方法の幅広さを実感することができた。使用楽器（用品）は次の通り：カバサ、ティンホイッスル、ハンドベル、ウィンドチャイム、タンバリン、ビブラスラップ、食器、水。

更に、声の効用も考慮に入れた。声も音の1つである。おいしいごちそうのシーンでは、おいしそうだと感動した声でおばけの気持ちを表現した。また、所々にジェスチャーを取り入れることで、オペレッタを演じている気持ちになった。

3) オープンキャンパスでの改善点

オープンキャンパスでの研究発表を元に、キッズフォーラムにおける発表において改善した点が2点ある。

第一に、全体的に前回より“見せる”ことを意識し、演奏・演技を行った。例えば、台詞「はーい」という部分に手を挙げるジェスチャーを追加するなど、随所に大がかりな演技を加えた。

第二に、おばけの衣装を身につけたことである。おばけは、白い布をミシンで四角に縫い、中央部分に頭を通す穴をあけ、キャストが揃いの蝶ネクタイをつけたシンプルなものであったが、それだけでステージの印象が全く変わった。

改善した結果、当日の子どもたちの表情は真剣そのものだった。ざわざわとした会場の中で、一生懸命に耳をすまし、目を輝かせ、ステージから広がる絵本の世界に夢中になっていた（写真11）。



写真11 「おばけパーティー」
2013年10月26日

4) 音楽絵本発表を通じて一心の音について

一般的に言えば絵本の世界には、音がない。しかし、心の耳をすませると様々な音が聞こえてくる。今回は、音楽表現により全員が同じ音を聞いたが、本来絵本から聞こえてくると思われる音は、個人のイマジネーションによるものなので、読み手により様々である。この経験を機に、子どもたちには聴こえない音を聞く力が生まれ、音の世界への興味関心が高まると考えられる。

2・6・2 オペレッタ「クリスマスファンタジー」

2013年度、音楽ゼミは、2回の音楽絵本発表だけでなく、第53回中・四国保育学生研究発表会と下関短期大学保育学科創作発表会においてオペレッタも発表した。

1) 制作の経緯

2013年度の初めから楽器班全員で時間をかけて台本作りを行う一方で、ダンス班はダンス

の基礎的な動きのレッスンを入念に行った。

コンセプトは演題名と同じ「クリスマスファンタジー」の世界で、それに最もふさわしい音色の楽器としてトーンチャイムを選び、編曲にも力を入れた。

2) オペレッタのストーリーについて

オペレッタのストーリーは、学生のオリジナルである。あらすじを紹介すると、以下の通りである。クリスマスイブの夜、子どもたちはツリーの飾りつけをしながら、おじいさんから聞いた不思議な出来事を話していた。それは、おじいさんが子どもの頃、雪深いあるクリスマスの夜、村人たちが心一つにしてお祝いのダンスを踊っていると、天使たちが空から舞い下りてきた、という夢のような話である。そこで、天使に会いたいと願う子どもたちは友人を集め、サンタやトナカイまで加わり賑やかな宴となったが、やがて夢が叶い、翼の生えたエンジェルたちがやってきたのだ。

3) 音楽とダンス

オペレッタで発表した音楽とダンスの工夫点は次の通りである。

・「あわてんぼうのクリスマス」(吉岡治、小林亜星)・「赤鼻のトナカイ」(ジョニー・マークス)

子どもたち、サンタ、トナカイが天使の降臨を期待しつつ踊る喜びのダンスで、子どもに理解しやすいシンプルな振り付けにした。

・「星に願いを」(映画「ピノキオ」1940年より)

天使の登場を象徴するライトモチーフとして、ウィンドチャイムとビブラホンで、幻想的な楽曲に編曲した。

・「きよしこの夜」(フランツ・グルーバー)

白い衣装の天使たちによるトーンチャイム合奏を行った(写真12)。編曲は学生が担当したが、高度な仕上がりととなった(図2・1)。

・「おめでとうクリスマス」(クリスマスカロル、17世紀、イングランド)

出演者全員によるダンスで手話を取り入れた(写真13)。この編曲も学生が担当した(図2・2)。オーケストラ使用楽器は次の通り：バイオリン、クラリネット、ビブラホン、ピアノ、エレキベース、スネアドラム、タンバリン、カスタネット。

4) 結果と課題

中・四国保育学生研究大会においては、大人も楽しめる演目のためか、客席は満員となり、シーン毎に大きな声援をいただいた。特に、神秘的なトーンチャイムの音色とハーモニー、ダンスの細やかな表現、唯一の男子学生によるおじいさん・天使・ベーシストというひとり3役の名演、この3点が注目を集めた。

課題としては、舞台上で演技のメリハリと思切りの良さが必要であったこと、舞台そでに



写真12 「きよしこの夜」演奏
(トーンチャイムアンサンブル)



写真13 「おめでとうクリスマス」演奏
(フィナーレ)



図2・1 大下紋加編曲「きよしこの夜」楽譜



図2・2 大下紋加編曲
「おめでとうクリスマス」楽譜

引くまで緊張感を保つことなどが挙げられた。2週間後の保育学科創作発表会では改善が見られた。

2・7 2014(平成26)年度:オペレッタ「あわたんぼうの贈り物」

2014年度は、今までで最も多い30名のゼミ生が、ダンス班と楽器班に別れて多種多様な活動を行っている。12月13日(土)の下関短期大学保育学科創作発表会において、オペレッタ「あわたんぼうの贈り物」を発表すべく稽古中である。これは、“股旅もの”と“クリスマス”という異種の様式をつないだものである。

3. 終わりに

音楽ゼミナールは、2008年度～2014年度の歩みにおいて、常に新しい発想でオペレッタ表現の可能性を広げてきた。そこに見られる特性としては、“西洋文化と日本文化の融合”、“異種な文化の混淆”が挙げられるが、それは意識して受け継いだものではなく、本学保育学科音楽ゼミ生が本来持ち合わせている傾向であろう。

音楽ゼミのオペレッタには、大人の聴衆にとって驚くべきファンタジックな世界が、一方で子どもにとっては日常起こりうるわくわくとした童話の世界が展開されている。このような歩みを通じて接した人々が、互いに異なった印象を持ちながらも、共に生きる喜びを感じてくださることを私たちは願っている。

問題点としては、1) 創作発表会までの授業及び放課後の練習計画を立てられないことがあった、2) キャストとスタッフの分業制が人数の制限もあり実現しなかった、3) 長年の課題であるステージマネージャーの確立ができなかった、この3点が未実行の課題として残された。

「音楽が好きな学生」と「音楽が得意な学生」の集合体である本ゼミは、これからも互いの長所を引き出し、緊密なコミュニケーションを取りながらオペレッタの伝統を引き継いでゆきたいと考えている。

謝辞

「音楽ゼミナール」の歩みにおいて、音楽的な指導をいただいたゴスベル歌手佐藤美紀子氏と本学非常勤講師の名越幸子氏、また種々の点でご指導いただいた本学理事の河野光子先生、保育学科長の堀尾昇平教授、音響設計や貴重な記録作成を行ってくださった桂武人広報・進路支援課長、賛助出演くださった本学付属第一幼稚園の皆さまに、心から感謝いたします。